

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770078

研究課題名(和文) 賀茂真淵を中心とする、古典注釈学と和歌に関する総合的研究

研究課題名(英文) General researches on Kamo no Mabuchi's waka and the interpretations of the Japanese classics

研究代表者

高野 奈未 (Takano, Nami)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：30646815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：賀茂真淵の業績を中心として、古典注釈学と和歌に関する研究を行った。古典注釈学については、特に先行する注釈の実態およびその伝播の状況を明らかにし、それに対する真淵を中心とする国学者たちの評価・受容に注目して、その注釈を分析した。和歌については、真淵の歌論・注釈学に見られる上代文芸に対する評価が、真淵自身および門人の創作活動において実践されていることを指摘し、各々の創作方法の特徴について論じた。以上の研究成果を含む、これまでに行った真淵研究を総括する著書『賀茂真淵の研究』(青簡舎)を刊行した。

研究成果の概要(英文)：I have studied Kamo no Mabuchi's waka and the interpretations of the Japanese classics. About Mabuchi's interpretations of the classics, I clarified the details of contents and the spread of the previous interpretations. I analyzed how the previous interpretations affected those of Mabuchi. About waka, Mabuchi and his pupils waka and essays were made similar jodai literary arts which he appreciated. Those research results were published by Seikansya as "The study of Kamo no Mabuchi".

研究分野：人文学

キーワード：日本文学 近世文学 古典注釈 国学 賀茂真淵 古今集 和歌 伊勢物語

## 1. 研究開始当初の背景

近世中期にはじまった国学は、古典文学の正しい読解により日本の精神を明らかにしようとする目的のもと、真淵以前の師伝を重視する古典注釈学を、実証的注釈に変化させた。現在の古典注釈学はこの国学者による方法が基盤となっており、国学者の古典注釈学は日本文化の特色、また日本の文化理解のあり方を捉えるために不可欠のものである。

これまでの国学研究では、体系だった思想のもとに実証主義をきわめた注釈を行った本居宣長を頂点と見なすのが一般的であり、宣長については著作の内容やその意義、門人の年譜に至るまで詳細な研究が進んでいる。一方、賀茂真淵は、この宣長や村田春海・建部綾足・加藤宇万伎らを門人に持つなど、当時の国学者の中枢に位置し、大きな影響を与えた人物である。その影響は古典注釈学以外の、前期読本など近世中期以降の新しい文学ジャンルの成立にも及んでいる。また、和歌活動においても『万葉集』重視をうたい、詠者の実感を重視した姿勢は、後に続く歌人に多大な影響を与え、近代短歌の発生を促すとともに、古典注釈学の新たな展開をもたらした。

こうした状況について、日野龍夫氏は、賀茂真淵の近世における影響力の大きさ、門人の数ならびにその層の厚さ、思想の「包容力」に鑑み、国学のピークを宣長から真淵に移し換えて国学研究を行うべきであると主張した(「近世文芸思潮研究」『文学・語学』第76号、1981・4)。また日本文学にとどまらず日本思想史・倫理学など関連諸分野においても、真淵の活動の実態や意義を明らかにするべく、様々なアプローチが試みられてきた。しかし、真淵研究は目立った進展を見せていない。それは、真淵の古典注釈学が先行する注釈を継承する部分を持ちながらも、ときに感覚的とも批判される斬新な注釈を行うという一見矛盾を孕んだものであること、著作・指導の記述が体系的でないこと、真淵の活動が思想・古典注釈学・国語学・和歌等の複数ジャンルにまたがるため統一的な視点を示しにくいことなどのためであるが、ひるがえってこれこそが日野氏のいう「包容力」ともなっており、ひいては古典文学の多様な読みの可能性を示す注釈を成り立たせている。

現在の国学研究の焦点は、宣長や春海等真淵の門人の活動へと移行しているが、国学そのものの意義や国文学史における位置付けはなされているとは言い難い。その大きな要因は、国学の基盤を築いた真淵の方法論、国学以前の最後の注釈とされ、真淵がよく用いている北村季吟の注釈の実態とその位置付け、それら先行する注釈と真淵の方法との差異や継承の具体相など、真淵に関連するさまざまな問題が解明されないまま研究が進められていることにあるといえる。

『万葉集』『伊勢物語』『源氏物語』などの

真淵が注釈を行った古典文学は世界各国で翻訳され、日本国内はもちろん世界的に関心が高い。真淵に注目しつつ古典注釈学の変遷をたどることは、日本古典文学作品の持つ多様性およびそれに対する研究の意義や新たな可能性を示すことともなる。そのためには真淵の個別の著作の実態解明を遂行するとともに、同時代の諸ジャンルとの関係性を明らかにし、それを古典文学史に位置付ける、より巨視的な研究が必要となる。

## 2. 研究の目的

研究にあたっては、日本古典文学の理解や受容、その意義を示すことにより、日本文化の特質を明らかにすることを目的としている。うち、「賀茂真淵を中心とする、古典注釈学と和歌に関する総合的研究」と題して行った本研究では、中世から近代までの古典注釈学および詠歌のありさまとその変遷を調査・分析し、賀茂真淵を中心とする近世国学者の古典注釈学と和歌の意義を新たに捉え直すことを目指して、以下2点を主要な研究の対象とした。

### (1) 古典注釈学研究

真淵の古典注釈学の業績を精査し、それ以前の注釈との共通点・相違点を明確にする。特に、先行注釈に対する批判に注目し、その実態を明らかにすることで、近世前期から国学成立期にかけての古典注釈学史を新たに構築する。

### (2) 和歌研究

真淵の和歌について、古典注釈学および歌論における上代和歌に対する評価との関連性に注目して、その創作方法を明らかにする。また、門人の詠歌を含む創作活動における真淵の影響を分析する。これまで研究代表者は、真淵は当代の古典注釈学・和歌の欠点を明確に把握したうえで、実現可能なあるいは最も効果的な古典注釈学および和歌革新を目指し、それらを展開したことにあって研究を進め、その成果を示してきた。本研究においても、古典注釈学と和歌を有機的に関連させて分析することで、真淵の学問の実態を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 真淵の古典注釈学は、これまで師である荷田春満との共通性が指摘されてきた。その春満注は先行する注釈を、師説に拘泥する、荒唐無稽なものとして激しく批判することに特徴があるため、真淵も基本的にそうした春満注を踏襲して先行注を乗り越えたものと見なされてきた。しかしながら、真淵の注釈学を精査すると、先行注を踏襲する部分も多く見られる。そこで、真淵の注釈学が先行注釈の何を継承し、何を批判したのかを、そ

の理由も含めて具体的に把握し、分析することで、真淵の古典注釈学の方法と史的位を明確にした。また、先行する注釈学の方法や師伝の形成・伝播の実態についても併せて明らかにした。

(2) 真淵および門人の和歌について、古典注釈学および歌論における古典文学作品に対する評価との関連性を指摘しつつ、和歌および和歌を含む散文作品を新たに読解し、その特徴を明確にした。さらに真淵と門人の作品が後世に与えた影響について精査した。

#### 4. 研究成果

(1) 研究代表者は本研究課題開始以前の研究において、真淵の『伊勢物語古意』は、それまで同質とみなされてきた師の春満『伊勢物語童子問』に対し、その作り物語説を発展させ、和歌から物語が作られる過程を論証するという独自性があることを指摘した。これにより真淵の新しさを示すことはできた一方で、真淵の注釈学を古典注釈学史に位置付けるためには、春満注釈と共通する部分について、それ以前の注釈との関係性を明らかにすることが課題となった。そこで、春満が先行注釈について、師説や秘伝を墨守する荒唐無稽なものとおしなべて見なしていることに注目し、春満の批判が妥当なものかどうかを明らかにするため、近世前期の『伊勢物語』注釈の実態を調査・分析した。この点につき、春満が参照したことが確実で、後世への影響も大きい北村季吟『伊勢物語拾穂抄』を対象に検討を進め、中世伊勢学と近世のその違い、写本と板本の違いを報告した(「季吟の古典注釈学『伊勢物語拾穂抄』の注釈方法をめぐって」鈴屋学会、2014年4月20日)。また、春満や真淵が「伊勢物語七ヶの秘伝」を批判していることから、先の学会発表での成果を踏まえ、この秘伝の内容と伝播について精査した。真淵の批判する秘伝は、物語を比喩的に捉えているのに対し、真淵は言葉で表現されるところの表面上の意味を重視しており、その結果、真淵の注釈学は近世前期のそれに見られる教訓的理解から離れていく過程に位置付けられるものになっていることが明らかになった。現在それについての論文を執筆中である。また、真淵の国学を研究することの現代的意義について、小論「真淵国学の魅力」(『楷樹』、58号、2016年2月)にまとめた。

(2) 真淵のいわゆる万葉調の和歌が、典拠の利用法、歌材・言葉の選択、表現の方法に注目して分析すると、「言い詰める」ことを避け、万葉語によって景を捉え直し「実感」を述べるという点で、自身の歌学における理想を实践したものと言えることは、真淵の驚の詠を対象に拙稿「賀茂真淵の驚詠」(『鳥獣虫魚の文学史 鳥の巻』三弥井書店、2011年)

で既に述べたが、それが門人にどのように継承されたかについては、真淵学の影響の実態把握という点でも明らかにする必要があった。そこで、真淵学の当代における享受と影響の具体相について調査・分析を行い、そのうち、県門女流歌人である鶴殿余野子の書簡文例集に関する研究成果を論文「真淵学の継承と実践 鶴殿余野子『月なみ消息』をめぐって」(『国語と国文学』91巻2号、2014年2月)として発表した。余野子の書簡文例集『月なみ消息』が、『源氏物語』の場面を想起させる設定のもと、主に『古今集』の歌を引歌に用いて作られていることを示し、本作が往来物という既存の形式を用いつつ、『古今集』を旨とするという真淵の女性門人に対する指導を实践した和文集となっていることを指摘した。真淵学の享受・影響の実態を明らかにしたものである。

(3) 真淵の師である春満は、神道学の影響を強く受けており、また歌学と神道学はそれ以前から関係が深い。賀茂真淵・上田秋成・本居宣長における神道学の影響について調査・検討を行い、うち秋成と宣長の天照大神に関する評価について、論文「宣長・秋成「日の神」論争」(『天空の文学史 太陽・月・星』三弥井書店、2014年)として発表した。宣長の天照大神観は同時代の神道学において全く奇妙なものとは言えず、しかし自身の思想の根源をなすものであったがゆえに、それに異を唱える秋成を激しく攻撃したことを示した。

(4) 研究代表者がこれまでに発表した真淵の古典注釈学と和歌に関する論文に全面的に加筆・修正を施したうえで、上記(1)(2)(3)を含む本研究課題における研究成果を加えて、『賀茂真淵の研究』(青簡舎、2016年2月)として刊行した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

高野奈未、「真淵国学の魅力」、『楷樹』、58号、査読無し、2016年2月、pp.2

高野奈未、「真淵学の継承と実践 鶴殿余野子『月なみ消息』をめぐって」、『国語と国文学』、91巻2号、査読有り、2014年2月、pp.34-50

〔学会発表〕(計1件)

高野奈未、「季吟の古典注釈学 『伊勢物語拾穂抄』の注釈方法をめぐって」、鈴屋学会、2014年4月20日、本居宣長記念館

〔図書〕(計2件)

高野奈未、青簡舎、『賀茂真淵の研究』、2016年、全278頁

鈴木健一編、三弥井書店、『天空の文学史 太陽・月・星』、2014年、pp.274-289

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高野 奈未 (Takano, Nami)  
静岡大学・教育学部・准教授  
研究者番号：30646815

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )